紹介　『図説　「見立」と「やつし」　日本文化の表現技法』

檜山裕子

人間文化研究機構国文学研究資料館で実施されている「近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究」プロジェクト。その研究成果として刊行されたのが本書である。平成十六年度より六年計画で発足、共同研究会などの通常活動に加え、平成十八年五月には国文学研究資料館にて展示「『みたて』と『やつし』―浮世絵・歌舞伎・文芸―」、シンポジウム「表現としての『やつし』と『みたて』」を開催し、現在も継続中である。展示・シンポジウムには専門研究者だけではなく、文学・絵画・演劇を学ぶ学生や一般の人々も多く来場し、豊富な展示資料や講演を興味と楽しみとともに受け取った。本書の内容はこうした活動を通して得られた成果と、執筆担当者個人が積み重ねてきた研究成果が結実したものである。

本書の題は『図説「見立」と「やつし」』、副題は「日本文化の表現技法」である。「日本文化」とあるのは「見立」「やつし」という表現技法が、文学・演劇・絵画その他多くの分野において歴史と共に積み重ねられてきたからである。それが各分野に於いて最も特徴的に現れ、意図的に使用されたのは江戸時代であると言っても良いだろう。

内容は大きく二つに分かれる。「第一章　図版資料　解読」と、「第二章　『見立』『やつし』への切り口」である。前半は図版資料が解説と共に、細部の鑑賞も可能な大きさで、カラー掲載される。後半は五人の専門研究者による研究論文集となっている。

第一章は、文学・絵画・演劇などの分野で見られる表現技法「見立」「やつし」を、江戸時代の資料によって示し、解説する。「見立」＝あるものを別のものになぞらえること、「やつし」＝権威あるものを卑近にして表すことと定義し、八つの項目が立つ。

「1　文学の『やつし』」では、和歌や『徒然草』を「やつし」の手法で示した絵本類、『源氏物語』を江戸に移したとされる『好色一代男』『偐紫田舎源氏』が示される。

「2　庭園の『やつし』」では、平安期よりいわゆる名所をなぞらえることで発達してきた庭園造営という文化が、江戸期にはさらに俗化して「やつし」の技法を使用するようになったことが、作庭書・茶道論書によって示される。「3　『見立』とその周辺」では、物を他のものに見立てて少し滑稽な解説を付した見立絵本（『絵本見立百化鳥』など）、なぞなぞの絵本（『絵本餘所画鏡』）、見立評判記（歌舞伎役者を魚に見立てた『魚尽役者評判記』など）が示される。「4　京伝の『見立』」では、江戸の戯作者で、画師・マルチクリエイターでもあった山東京伝の記した洒落本や見立絵本が示される。柄のカタログのように見えて、実は滑稽な絵解きがされている『小紋

雅話』『手拭合』などは、絵と文学の才に恵まれた京伝らしい作である。「5　見立番付」は人形浄瑠璃の芸人を相撲の番付風に格付けした『三都太夫三味線人形見競鑑』、歌舞伎番付風にした『浄瑠璃太夫三味線競』を示す。「6　『やつし』の多義性」では、当時の国語辞書である『倭節用集悉皆嚢』が示される。この書の「やつす」という語句の項を示し、そこに記された内容を検討することで、近世語としての「やつし」の多義性を説く。「7　浮世絵の『やつし』」ではまず、小野小町を「やつし」た鈴木春信、初代歌川豊国の錦絵が示される。次に『源氏物語』を「やつし」た江戸期の合巻『偐紫田舎源氏』に取材した錦絵『其姿紫の写絵』を示し、『源氏物語』との関係を解説する。「8　浮世絵の『見立』」では、「見立」の技法が使われた浮世絵が示される。歌麿の錦絵が一点、幕末から明治の美人画が二点、そして多数の役者絵がおさめられる。

「8　浮世絵の『見立』」におさめられた役者絵についてさらに述べておく。第一章の中で最も多くの頁が使われたこの部分には、幕末に活躍した歌舞伎役者達の錦絵が約六十点おさめられている。もちろん、すべてに「見立」の技法が使われており、解説に従ってそれを解きつつ鑑賞する楽しみもある。さらにこの圧倒的な分量の役者絵をまとめて見ることで、芝居の世界に遊ぶ楽しみも味わうことができる。この役者絵のうち七点は、本書一頁分の大きさで掲載されており、色彩、細部の表現、絵の持つ迫力を充分に堪能できる。

資料が示す説得力。それはこの本に使用された紙による効果もあるだろう。少し色を帯びた、和紙に通じる質感の紙に、すべてカラーで印刷された掲載資料。写真ではなく、紙に印刷された「絵」を鑑賞しているという感覚を、楽しむことができる。

第二章には八本の研究論文が収められる。論文のテーマと内容の多くは、第一章で示された図版資料とも関連を持っている。

新藤茂「『見立』と『やつし』の定義」はその題の通り、「見立」「やつし」の語を定義し、研究史や用例にも触れる。鈴木春信の浮世絵とその題を素材に、見立絵、風流やつし絵について述べる。加藤定彦「やつしと俳諧」は近世初期の俳諧、中でも『虚栗』頃の蕉風俳諧を「やつし」の観点から考察する。中国の漢詩人の風流あるいは風狂精神、その発露である〈侘び〉と〈艶冶〉の共存を俳諧に見、和漢の古典文化を近世化した〈風流〉精神の発露がやつしという方法であることが述べられる。歌舞伎、西鶴作品も俎上にのぼる。この論で触れられる西鶴の『好色一代男』は、第一章の「1　文学と『やつし』」において図版を鑑賞することができる。

佐藤恵里「やつしと歌舞伎」は、歌舞伎における「やつし」の方法・表現が、寛文期より見られることを指摘し、悪所を舞台とした「恋のやつし」がやつしの芸の出発点であるとする。それは「恋の奴」という形で現れ、紙子という「やつし」の記号ともいうべき道具に象徴されて流行する。武井協三「〈見立〉と歌舞伎」は、初代市川団十郎がさる大名の屋敷で殿様に荒事芸を望まれ、景清の謡とともに書院の障子襖を踏み折って、大変褒められたという伝説化したエピソードを事実ととらえ、「見立」について考察する。団十郎の行動を、障子襖を牢の格子に見立て、とっさに『出世景清』の牢破りを演じて切り返したものとし、歌舞伎の根底に見立てという発想が根付いていることを指摘する。

加藤定彦「やつしと庭園文化」は、神仙思想につながる中国の瀟湘八景などの名勝が、縮小し一般化して発達したのが日本の庭園文

化であり、そこに「やつし」の手法があることを述べる。手法の範囲は庭園にとどまらず、立花、茶の湯にも及ぶ。第一章「2 庭園の『やつし』」に載る『余景作り庭の図』『古今茶道全書』『築山庭造伝』は論の重要な資料として使われている。安原眞琴「なぞなぞと見立」は「『絵本餘所画鏡』を端緒に」という副題を持つ。第一章「3 『見立』とその周辺」に図版の載る『絵本餘所画鏡』について、少ない資料の中からボストン美術館所蔵の『四季風俗図巻』や『絵本常盤草』を手がかりとして、刊年、画師等の推定を試みる。さらに作中のなぞなぞを「変則三段謎」とし、見立絵による表現にも触れる。

延広真治「見立と戯作」は、江戸の戯作者の中でも多くの優れた見立絵本を記した山東京伝について述べる。まず同時代に見られる「見立」の手法について、和歌・俳諧・狂歌をはじめとする十五種類の分野の有り様を概観する。次に京伝の見立絵本について述べる。論の中で取り上げられる『小紋雅話』『絵本見立百化鳥』『手拭合』は第一章の3、4に図版が載る。作品において「見立」の手法を文章に絵に自在に使いこなす様子を、延広氏は「属目した万物を見立てずにはおかなかった」とするが、まさにその通りである。高橋則子「『見立』と『やつし』〈試論〉」は、中世から江戸にかけての「見立」の変遷、江戸期の「やつし」の多様性を述べつつ、第一章と第二章を総括する。第一章で掲げられた美麗な図版が示したもの、第二章で述べられた多くの分野にわたって展開する各論が繋がりあって、豊かな江戸時代の文化的世界を構成するさまが見える。そしてそれは江戸期になって突然発生した物ではなく、それまで積み重ね養われてきた日本人の感性が、一層数を増し、一般化したものであることが示される。

「見立」と「やつし」。決して日常的な言葉ではない。まず思いつくのは、横溝正史ミステリの「見立て」殺人や、時代劇によくあるお殿様が浪人に身を「やつし」て…といった用例ぐらい。そんなお粗末なレベルの者に、本書は「見立」と「やつし」がいったい何であるかを明確に提示し、多様で彩り豊かな世界を見せてくれた。ただ、これだけ丁寧に「見立」とは何で、「やつし」とは何かを解説してもらったにもかかわらず、「『見立』とされているがこっちの側面から考えると『やつし』ともいえるのではないだろうか?」「こっちは『見立』でこっちは『やつし』となっているが、この事例にそれほどの違いがあるだろうか?」と思考が堂々巡りすることもあった。本書の中でも触れられているが、諸氏の異なる見解も、明確な線引きが難しい点もあるとのこと。そこを敢えて明示したことには、思い切った決断も働いたのだろう。その御陰で多種多様なものがこの一冊の中にとどめられたのである。御学恩に深謝したい。

プロジェクト研究の成果としての刊行物。このように述べると堅くそっけないものを想像するかもしれないが、八木書店から刊行されたこの本からは、あたたかみのある印象を受ける。緑の濃淡で揃えた布張りの装丁と見返し。それに雲英刷りを思わせる光沢のカバーがかかり、表紙の部分には、浮世絵とタイトルの「見立」「やつし」の文字が、スタイリッシュに組み合わされている。愛蔵したくなる本である。

巻末には人名・書名・作品名から引くことが可能な索引と、英語のSummaryが付される。最後に現在も継続中のこのプロジェクトが示した大きな成果に敬意を表し、プロジェクト参加者と、研究を

補助した方々のお名前を挙げさせていただく。

〈参加者〉井田太郎・加藤定彦・金子俊之・佐藤恵里・新藤茂・
武井協三・延広真治・原道生・安原眞琴・山下則子（代表者）

〈補助・補佐〉光延真哉・鈴木博子・岩城賢太郎・中島次郎・
河野結美（掲載順・敬称略）